

実在と現実

リアリティの

消尽点へ

向けて

Reality and Actuality

山本幾生

実
在
と
現
実

リアリティの消尽点へ向けて

山
本
幾
生

はじめに

VR（バーチャル・リアリティ）という言葉が仮想現実という訳語とともに私たちの生活に浸透してきたのは、いつ頃からであろうか。

第二次世界大戦後、日本が高度成長を成し遂げ、テレビをはじめ電化製品がわれわれの生活の一部となったとき、テレビはその向こう側に実在する世界を茶の間に映し出した。そしてまた何度目かの戦争が起こったとき、テレビはコンピュータ制御によってピンポイントを狙うミサイル弾を映し出した。しかし、テレビ映像の向こう側に流血の現実が実在しているという、そのリアリティは感じられなかった。仮想のテレビゲームのようでさえあった。テレビのディスプレイがその向こう側に実在する現実をリアルタイムで映し出し、そのリアリティを創出しようとするほど、かえってリアリティは消失していくのであろうか。これは流血場面を映すか否かというメディア操作の問題だけではなからう。むしろそれ以前の、ディスプレイに映し出される像のリアリティと、実在する現実のリアリティとの相克の問題として、ディスプレイの映像がよりリアルに創出されればされるほど、ディスプレイ機器をも含めたこの現実のリアリティがますます消尽されるように見える。

テレビだけではない。今日ではビデオ、CD、DVD、そしてインターネットを介してディスプレイのへ向こう側へがへこちら側への「現実」の生活の一部になっている。しかもコンピュータ技術の飛躍的な進歩によって開発されたVR装置は、実在しない虚構や仮想でさえも、それが実在するのと同質的に同等に機能させ、リアリティをますます創出することができる。しかしこれは、実在する現実のリアリティがますます消尽されることを意味するのであるか。リアリティの創出と消尽、この矛盾した事態はどのように考えられるべきなのであるか。どこに、どのような問題が潜んでいるのであろうか。

先ごろ、日本小児科医師会が「子供とメディアの問題に対する提言」を発表した。テレビやビデオを見る機会が多い乳幼児に言葉の遅れや他人と視線を合わさないなどの問題が多く見られるため、乳幼児がメディアに接する時間を制限するよう呼びかけたという。しかし、なぜテレビやビデオなどの視覚に訴える電気的なヘディスプレイものへであって、絵本や小説ではないのであろうか。絵本、小説、テレビ、ビデオ、そしてVR、これらがそれぞれの仕方では虚構の世界を描くとき、また実在の世界を映し出すとき、何が違うのであろうか。そしてこれらは、虚構と実在、リアリティの創出と消尽の中でわれわれの「現実」をどのように象かたどっているのであろうか。

メディアが変わっている。時代も変わり、人間も変わる。紀元前数世紀の古代ギリシャにおいて愛知として生じた哲学は、永遠普遍の知を希求した。それぞれの時代や国、個人などの生成消滅するへ移ろい、脆く、仮のものへを超えて、永遠普遍の知であるへ留まり、確固とした、真実へを希求してきた。しかし、哲学は時代の子でもある。紀元前数世紀、エーゲ海を臨む古代ギリシャの地で哲学

が学問として生まれたのであって、ほかならぬこの時代のこの日本で、あるいは他の時代の他の地で、哲学が生じたわけではない。哲学が時代と地域を超えたものを求める学問として成立したとしても、その営み自身は時代と地域に制約されている。それでは、時代の子である哲学は、時代を超えたものを求めながらも今日の「現実」をどのように考えるのであろうか。

本書の意図は実在と虚構、仮想と現実、これらの纏れ合った糸を解きほぐしながら、それを西洋近世哲学の中で生じた物体あるいは外界の実在性の問題の延長線上で考えることにある。したがって、今日のVRやさまざまなメディアについてテクノロジーや文化の側面から論じているわけではない。むしろ、実在そして現実という言葉でわれわれがどのような事柄を考え、しかもその事柄がわれわれの生・生活にどのように関わっているのか、この点を明らかにするのが本書の意図である。

そのさいに本書が手がかりにしているのはデイルタイの哲学である。それは彼が一九世紀末、精神科学を学問として基礎づけようと試みながら、ほかならぬ「歴史的社会的現実」を問い求めたからである。そして次に本書でスペースを割いたのは、ショーペンハウアーの哲学であり、ハイデガーの哲学である。前者は一九世紀前半、外界の実在性の問題のもつ思弁性を剥ぎ取り、そこに経験的眞実性を見出すことによつて実在性の問題に決定的な転換を図つたからである。本書はその転換に注目する。後者は二〇世紀初頭、デイルタイの哲学に触れながら生の事実性の分析へ向かうと同時に、ある地点でデイルタイと袂を分かつからである。本書はその分岐点に注目する。ショーペンハウアーにおける転換点、デイルタイとハイデガーとの分岐点、これらに注目することによつて、西洋近世哲学において生じた物体・外界の実在性の問題から今日のVRにおけるリアリティ概念にいたるまでの道筋が見

えてくると思えるからである。そして最後に、英語の *being* についてのオースティンの分析に目を向ける。われわれが片仮名で使っているリアルあるいはリアリティという言葉の意味合いを探るさいの手がかりになるからである。

このように本書は幾人かの哲学者を手引きとはするが、各々の哲学の年代史的發展や相互の影響関係を総括的に描こうとしているのではない。むしろ、哲学の問題として生じた外界の実在性の問題を通して各々の哲学はVRにおけるリアリティ概念を典型とする今日の「現実」に対してどの程度の射程を持っているのか、そしてその射程の中で今日の「現実」はどのような「現実」として現れてくるのか、しかもどのような問題をはらんだ「現実」として現れてくるのか、このような問いに本書の関心がある。

本書はこのような意図と関心のもとで、近世に入って生じた物体・外界の実在性の問題を概観し（第一章）、実在性概念が「物体の、精神への非依存的存在性」という意味合いを基本にして、「物質性」そして「真実性」という意味も含意されながら理解されてきたことをまず確認する（第二章）。そして本書は、実在性概念がさらに、「作用性」から理解されてきたことに注目する。すなわち、「作用する（影響を及ぼす、など）ものは実在的である」というデイルタイの考えに注目しながら、デイルタイを批判したシェーラーそしてハイデガーの議論を整理し、「作用の源泉」としての「実在性の源泉」へ遡源する（第三章～第五章）。そしてまた、作用（*独 wirken*, 英 *act*）が現実（*独 Wirklichkeit*, 英 *actuality*）を形成するといふ、語の連関を転換点にして、歩みを実在性から現実性に向け、双方の概念的意味的な連接と区分を明瞭にする（第六章）。かくして実在しない虚構や仮想であって

も作用することによって現実を象るといふ、かたどへ現実の象りへあるいはへ生の象りへという考え方を提示する（第七章）。そして最後に、かたどへ現実の象りへという観点から、オースティンの分析を出発点にして物体の実在性の問題の変遷を捉え直すことによつて、實在という言葉が現実を象る言葉であることを明らかにすると共に、今日のVRのへ現実へにおいては近世初頭に生じたへ物体の実在性の問題へがへものの不在性の問題へへ変換していることを提示する（第八章）。

近世初頭に生じた物体の実在性を求める問いは、今日、ものの不在性を尋ねる問いへ変換する。それは、リアリティの創出が同時にリアリティの消尽であるという、リアリティの消尽点への問いである。リアリティの創出と消尽、ここに今日固有のへ現実の生の象りへを見出すこと、これが本書の目指す地点である。

凡例

- 一 引用・参照文献は巻末に文献一覧として一括掲載し、また引用・参照注は各章ごとに章末にまとめて付す。
- 二 引用・参照は巻末の文献一覧に基づいて以下のように表記する。
 - ①全集からの引用・参照は、次のように示す。全集略記号は巻末の文献一覧に記す。
著者、全集略記号と巻数（アラビア数字）、頁数（頁略記文字とアラビア数字）
例 Dilthey, GS19, S.382.
 - ②単行本からの引用・参照の場合、その幾つかは著書名の略記号で表し、次のように示す。略記号は巻末の文献一覧に示す。
著者、略記号、頁数（頁略記文字とアラビア数字）
例 Heidegger, SZ, S.123.
 - ③右記以外の論著については、次のように示す。
著者、論著の出版年（アラビア数字）、頁数（頁略記文字とアラビア数字）
例 Poggeler, 1962, S.251.
 - ④右記以外の表記を採る場合は、巻末の文献一覧に掲載の当該文献の事項にそれを付して示す。
- 三 引用文中の……は、引用者による断り書きがないかぎり、引用中略を示す。
- 四 引用文中における強調は、引用者による断り書きがないかぎり、引用者による。原文における原

著者による強調は、引用にさいして強調を解いて通常表記に直している。

五 引用文中の「」内は、引用者による補遺である。

六 ショーペンハウアー、デイルタイ、ハイデガーの全集に所収の論著名等は、巻末に著作年表として一括掲載する。

七 デイルタイにおける精神科学の基礎づけの構想は、本書で必要なかぎり、資料の年代順に巻末に掲載する。

目次

はじめに	i
凡例	vi
第一章 実在するとはどういうことか	1
一 実在という言葉	1
二 実在 —— 日常の中で	6
三 実在とモノ —— 哲学の中で	12
四 モノのモノ性 —— 哲学の迷路	17
五 物体の実在性 —— 経験の中で	28
六 実在するとはどういうことか	33
第二章 夢と現の狭間	49
一 ショーペンハウアーと実在性の問題	50
二 物体の実在性の問題の二つの起源	54

三	夢と現の区別	60
四	意志と表象の絆	67
五	実在性概念の意味展開	72
六	意義と実在性	78
七	意志と表象としての世界	84
第三章 「実在性の問題」について		
一	デイルタイとシェーラーへのハイデガーの批判	95
二	シェーラーの反論	99
三	ハイデガーの方向転換	103
四	シェーラーとデイルタイ	108
五	実在性の抵抗経験	115
六	実在性の源泉 — デイルタイ	119
七	実在性の源泉 — シェーラー	126
八	実在性の問題	131
第四章 実在性と存在一般		
一	実在性のもう一つの問い	145

二	諸存在の統一性	151
三	実存と実在性	155
四	存在一般の意味への問い	158
五	関心と存在一般	162
六	実在性と眼前性	166
七	眼前に在るものと元々在るもの	170
八	自然	175
九	存在一般と存在者全体	180
十	存在一般への問いと実在性への問い	182
第五章 実在性 —— 物質性と作用性		
一	問題設定	197
二	精神科学の基礎づけと外界の実在性の問題	199
三	意識の事実と覚知	203
四	『外界の実在性論考』における「実在性の問題」	207
五	物質性と作用性	214
六	他者の不在性	222
七	作用性としての実在性	226

第六章	実在から現実へ	241
一	他者の実在性の問題から現実性の問題へ	242
二	われわれの現実へ向けて	256
第七章	現実性について	273
一	問いと方向性	273
二	事実性としての現実性	275
三	現実性の濃淡化	280
四	現実性の力動的性格	285
五	実在性と現実性	290
六	実在性と不在性への問い	295
第八章	現実の象り —— 実在の世界から仮想現実(VR)の世界へ	303
一	「リアル」と「実在」	304
二	問題の変遷	316
三	実在―作用―現実	326
四	結び	336

おわりに	343
------	-----

巻末

文献	i
----	---

資料	vii
----	-----

一 デイルタイ 精神科学の基礎づけの構想	vii
----------------------	-----

二 ショーペンハウアー (1788-1860) 著作年表	x
------------------------------	---

三 デイルタイ (1833-1911) 著作年表	xii
--------------------------	-----

四 ハイデガー (1889-1976) 著作年表	xviii
--------------------------	-------